おかあさんの生まれた家

前川康男
絵 織茂恭子

おかあさんの生まれた家

前川康男
絵 織茂恭子

913

前川康男

おかあさんの生まれた家

講談社　1979

173p　22cm（児童文学創作シリーズ）

まえかわ　やすお

おかあさんの生(う)まれた家(いえ)

昭和54年10月16日　第1刷発行

定価880円

著　者　前川康男(まえかわやすお)

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　株式会社若林製本工場

© 前川康男 1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-189321-2253 (0)　（児一）

おかあさんの生まれた家

——もくじ——

1　飛びっちょが三年生のとき……4

2　おかあさんの生まれた家……32

3　のっぽ少年……57

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4 まっ白い小鳥……81

5 一まいの写真……96

6 山の小さな町……120

7 ある夜のできごと……148

第一章　飛びっちょが三年生のとき

1

飛びっちょという子の話をします。

飛びっちょというのは、もちろん、その子のあだ名です。ほんとうの名まえは、としゆき（利行）といいました。

どうして、そんなあだ名がついたかといいますと、としゆきがクラスでいちばんちびっちょだったからです。ちびっちょで、すばしこくて、ぴょんぴょんよくはねまわり、野球やサッカーがじょうずだったからでした。走るのもはやいし、てつぼうのけあがりもらくにやりましたし、うさぎとびきょうそうなら、

だれにも負けません。それに、ちびのくせに、すもうも強かったのです。

さて、その飛びっちょが三年生のとき、夏休みがおわって二学期がはじまったころ、飛びっちょをおどろかせるようなできごとがありました。どんなできごとか、それをお話しようと思うのですが、いくらぼくでも、飛びっちょのことをなにからなにまで知っているわけではありません。飛びっちょがぼくに話してくれたこと、ほかの人から聞いたこと、いろいろなことをつなぎあわせて、お話するわけです。

ぼくの話を聞いて、

「なあんだ。じけんでもなんでもないじゃないか。そんなことは、できごとのうちにはいらないよ。」

そういう人がいるかもしれません。でも、飛びっちょにとっては、大きなできごとでした。なぜかといいますと、それまで一日じゅう友だちとわいわいあ

そんでいたのに、飛びっちょはぴたっとあそばなくなり、勉強もぜんぜんしなくなってしまったのです。

勉強ができるほうだった飛びっちょが、

「としゆき、ぼんやりするなっ！」

と、先生にどなりつけられたり、黒板のまえに立たされたり、教員室によばれたりするようになりました。

「おい、飛びっちょ、どうしたんだい？」

「なにかこまったことがあるのか。あるんだったら、そうだんにのってやるぜ。元気だせよ。なあ、飛びっちょ。」

なかのいい友だちが、そう聞いたくらいです。

そうです、そのできごとを話すまえに、ちょっと、飛びっちょの家のこと、それからおとうさんとおかあさんのことを、お話しておかなければなりません。

飛びっちょの家は、東京にありました。東京のにぎやかな町の表通り、菊屋というお店で、ハンドバッグだけを売っているせんもん店でした。小さいけど、なかなかお客のおおい、わりに有名な店です。というのは、品ものがいいことと、菊屋の主人がじぶんでデザインした、この店にしかないハンドバッグを売っていたからでした。

菊屋のご主人は、せのすらっとした、七十さいくらいのおじいさんです。あたまのかみをいつもきれいにとかしていて、着ているものもきちんとしていました。すてきなセーター・シャツ・ズボン、くつもぴかぴかでした。

すこしがんこですが、いいたいことをぽんぽんという、気もちのからっとした人です。

「ここは、東京のまんまん中さ。ここいらへんで売っているのは、東京一の品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もんだ。銀座にだって、負けるもんかい。」

「しかし、このごろ、町がよごれたね、ほこりっぽいこと、ガンガン、ガチャガチャうるさいこと。きれいな町にしたいよ、すっきりした、おちついた町にね。ごみなんかほっぽりなげたら、しょうちしねえから。」

おじいさんは、よくそういっていました。この人は七十いくつですから、飛びっちょのおとうさんではありません。飛びっちょのおじいさんなのです。

さて、つぎに、飛びっちょのおとうさんとおかあさんのことをお話します。いま、菊屋のご主人は飛びっちょのおじいさんですといいましたが、飛びっちょには、おとうさんもおかあさんもいなかったのです。ふたりとも、飛びっちょが赤んぼうのころになくなってしまったのでした。

おじいさんは、まごの飛びっちょに、こんなふうに話していました。

「としぼうのおとうさんはな、としぼうがおかあさんのおなかの中にいるうちになくなってしまったんだ。冬のはじめだったよ。川に落ちた子どもを助けようと、おとうさんは、川へとびこんでね。泳ぎはたっしゃだったから、子どもは助けあげた。たしか五つの子どもだった。子どもは助かった。ところが、じぶんは急性肺炎という病気になって、あっというまになくなってしまったのさ。入院して二日めにね。おとうさんは一週間くらいまえからかぜをひいていたんだ。それが、いけなかった……。」

おじいさんは、飛びっちょのおとうさんが三十ちょっとで、じぶんより早くなくなってしまったことがくやしくてくやしくてたまらなかったのでしょう、その話をなんどもくりかえし飛びっちょに話していました。

「それから、おかあさんはな、おとうさんがなくなって、としぼうが生まれて、六か月くらいになったとき、やはり病気になって、なくなってしまったん

だよ。」

両親がいないので、飛びっちょは、おじいさんとおばあさんにそだてられました。ふたりは、飛びっちょをとてもかわいがって、

「あれがほしいんだけど。」

と、飛びっちょがいうと、よっぽど高いものでないかぎり、本でもぶんぼうぐでもおもちゃでも買ってくれました。そして、めったなことでは、しかったり、おこったりしませんでした。

おばあさんも毎日、飛びっちょのためにいっしょうけんめいおいしいものをつくってくれました。

「としゆきはね、わたしのつくる料理は、なんでもおいしいおいしいって食べてくれるんですよ。」

おばあさんは、ほおがほんのり赤く、ふっくらふとった、かわいいかんじの

人でした。

あ、そうです。いいわすれるところでした。飛びっちょは、おとうさんおかあさんがいないだけでなく、きょうだいもいなかったのです。ひとりっ子でした。でも、飛びっちょはけっしてよわよわしい子どもではありません。両親がいないからといって、めそめそしたり、ぐじゅぐじゅすねたりするようなことのない子どもでした。

2

まえおきが長くなりましたが、では、夏休みがおわってまもなくのできごとというのをお話することにします。

九月はじめの、ある日の午後のことです。

飛びっちょが学校からかえってくると、おばあさんが店のそうじをしていて、店のおくにこげ茶色のくつがそろえてありました。

（ぞうさんのくつだ！）

見なれているくつなので、すぐわかりました。

（ぞうさんは、きっとおじいちゃんとしょうぎをやっているにちがいない。よし、そうっといって、おどかしてやれ。）

飛びっちょは、足音をしのばせて家の中へ。

ぞうさんというのは、菊屋からあるいて三十分くらいのところにあるペンキ屋のご主人で、清三という名まえです。この人は、飛びっちょのおとうさんの友だちでした。

かたはばがひろくて、がっしりした大男、日にやけてまっ黒なかおをしているので、飛びっちょはこの人のことをぞうさんといっていました。耳たぶの大

きいところもにていますし、にこにこしていて、名まえも清ぞうだから、ぴったりのあだ名でした。

（やってる、やってる。）

思ったとおり、ふたりはパチッパチッとしょうぎをやっていました。茶の間のてまえで、中のようすをうかがうと、おじいさんの声が聞こえてきたのです。

「おっほん、なあ、清三さん、池野医院のみなさんは、お元気でしょうかね？ずいぶんお会いしてないが。」

すると、清三さんがいいました。

「ああ、たつ子さんのうちですか、それが、わたしもずっとごぶさたで、もう二年いじょううかがっていないんですよ。」

「池野さんのおくさんが……。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com